

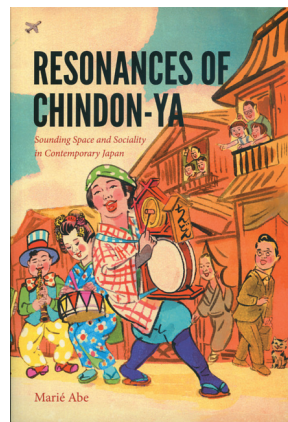
阿部万里江

『チンドン屋の響き』

——現代日本における音の空間と社会的つながり』

Marié Abe, *Resonances of Chindon-ya: Sounding Space and Sociality in Contemporary Japan*

輪島裕介



Wesleyan University Press, 2018

本書は、チンドン屋を主題として書かれた、おそらく世界初の学術的モノグラフである。音を用いた街頭での宣伝であるチンドン屋は、音を用いた宣伝という点では潜在的には中世まで遡りうるものであるが、その本格的な形成は、明治維新をはさんだ時期になされた。幕末、十九世紀の半ばに依頼主から請け負って宣伝を代行する広告業が成立し、十九世紀末以降、軍楽隊に由来する西洋式の吹奏楽器や太鼓をとり入れた楽隊広告となり、一九三〇年代には現在の形態に直接連続するきわめて独特な和洋折衷のスタイルが確立する。第二次世界大戦による中断をはさんで、一九五〇年代に隆盛するが一九六〇年代以降急速に衰退し、一九八〇年代以降、新たな文脈で復興している。本書は、「現代日本における音の空間と社会的つながり」という副題が示すように、

上述の歴史的経緯を十分に参照しながらも、復興期である現代において、一見時代遅れのようにも見えるこの実践が、実践者たちのどのような歴史的意識および想像力によって担われ、また現代の社会的な状況の中で文化的・政治的な意味を持つて聞かれるのかについて主題的に検討するものである。ここでは、チンドン屋は、近代と伝統、芸術と商業、音楽と（騒）音、日常と非日常という複数の対の間にある両義的な実践として捉え返される。この点において、近年一般化しつつある近代日本における西洋音楽受容史研究の枠組みを超えて、「音」と「音楽」の区分に関する感覚の歴史的編制や、「音の商売」であるチンドン屋を通じた近代日本の資本主義の展開と公共空間の変容、それに対する政治的介入の試みといった、すぐれて今日的な問題提起と省察を行うことに成

功している。本書の主要なインフォーマントは大阪の「ちんどん通信社」であるが、同社は、大学在籍時に「ルーツ」音楽への興味からチンドン屋を発見し弟子入りした林幸治郎という稀有な人物と、その大学時代からの仲間たちによつて一九八〇年代に設立され、現在では全国最大級の規模と質をもつ団体に成長している。衰退の後の自覚的な復興運動のなかで現れたチンドン屋集団に焦点を当てることは、これを歴史の対象としてのみならず、現代日本における批判的・反省的な実践として捉えることにおいて決定的に重要な意味を持つているだろう。

著者の阿部万里江は、日本で生まれ、中等教育以降を英語圏で受け、現在はアメリカで活動する民族音楽学者である。本書はカリフォルニア大学バークレー校に提出された博士論文に基づいているが、東日本大震災以後の経験に即して大幅に加筆されている。彼女自身、優れたアコーディオン奏者だが（表紙の魅力的なイラストで、隊列の後方に描かれるアコーディオン奏者は彼女自身をモデルにしている）、民族音楽学（音楽人類学）の伝統に反してチンドン屋の日常の実践に演者として参加して調査することはあえてせず（他の演者の経済的な利益を奪うことを避けるための倫理的判断に基づく）、しかしながらチンドン屋から派生した様々な音楽実践には積極的に関わることで、インフォーマントから、調査者としてのみならず同業の音楽家としての信頼を得ている。伝統的な参与観察

の代わりに、狭義の音楽研究に留まらない広範な音文化の研究を志向する新たな研究潮流であるサウンド・スタディーズの知見や、ルフューブルに由来する批判的な人文地理学における空間概念を駆使して、学際的でありながら一貫した問題意識に貫かれた研究方法も非常に興味深い。

本書の構成は、プロローグ、イントロダクション、五章の本論、エピローグからなる。プロローグでは、本書全体に関わる主題が、読み手の想像力を喚起する断章の形で示される。続くイントロダクションでは、東日本大震災後の東北での演奏旅行の描写からはじめ、チンドン屋の歴史と現在を手際よく紹介したうえで、伝統と近代、音楽と（騒）音の間にあり、既存の産業の分類にも当てはまらない「音の商売」としてチンドン屋を位置づける。さらに、音と公共空間と社会的つながりとは関連し合う仕方に関する問題設定を行い、そのための中心的な分析概念として「響き *hibiki* / resonance」について検討する。日本語をアルファベット表記した *hibiki* を用いることで、街に鳴り響く音響現象としての響きと、「心に響く」という場合の情動的な意味の二重性に注意を喚起する。また、「回折 *diffraction*」という概念を用いて、水に石を投げ入れると、一つの波紋がまた別の波紋を生み出し、それぞれが相互に影響し合うことよつてある型を作る、という比喻によつて、相互に変化させあうものとして「響き」の働きを捉えているのも興

味深い（とはいえ評者が術語としての「回折」の意味を十分に捉えきれているかはやや覚束ない）。

本論第一、二章では、チンドン屋の実践者たちの活動や発言から看取される歴史および歴史的想像力に関して議論される。第一章「歩く歴史」では「歩く」ことが主題となり、チンドン屋がジグザグに歩くことから、軍隊の行進というきわめて西洋近代的な身体運用の導入と結びついた音楽隊由来の器楽編制が、いかに別の身体性と、それが体現する歴史性と結びついていったかを明らかにする。第二章「魅惑を演じる」では、著者が「民族誌のおとぎ話」と呼ぶ、チンドン屋に魅了されて遠くまでついていってしまった、という多くの人の回想から話を起こし、「大衆」概念の歴史の検討を介して、チンドン屋の音、とりわけ鉦かねの音が喚起するノスタルジアと他者性について言及する。そのうえで、チンドン屋が周縁化された人々と結びつくと同時に、本質主義的な日本文化論とも結びつきうる両義的な傾向について指摘する。

第三章「想像共感の音を発する Sounding Imaginative Empathy」では、チンドン屋の日々の活動や、そこにおける演者の意識、演者たちによって想像された聞き手の情動的反応について詳述される。最もオーソドックスな民族誌記述とも言える部分であり、決して長大ではないが、凝縮された記述から、著者のフィールドワークの充実が伝わってくる。「想像共感 imaginative empathy」は、最も

単純化して言えば、「姿が見えない聞き手とその気持ちを想像すること」であり、章題で *sounding* という動名詞型を用いることで、音を単に物理現象として捉えるのではなく、音を出す行為や、発せられた音が、その音によって特徴づけられる公共空間において、顕在的また潜在的な聞き手に対して能動的な働きかけを行うことを含意している。この用法は、「音楽」をモノではなく行為と捉えるため *music-making* という語を用いる、クリストファー・スモール以来近年の音楽研究で知られるようになった考え方を、さらにサウンド・スタディーズの文脈で援用していると考えられる。

第四、五章は、チンドン屋の路上宣伝業としての業態を越えて、「チンドンに触発された音楽 chindon-inspired music」とその政治性について論じる。第四章「チンドン屋を政治化する」では、ソウル・フラワー・ユニオン、シカラムータ、大工哲弘、趙博（パギヤん）といった音楽家を取り上げ、彼らにとって、チンドン屋の響きがどのような政治的な意識と結びつくのかを論じ、「まつりごと」という日本語の語彙における政治と祝祭の二重性に注意を喚起する。第五章では、特に、東日本大震災後の状況を念頭に置いて、反核デモにおけるチンドン屋の存在や、チンドン屋の稼業にとって致命的な影響を与える「自粛」について、昭和末期の記憶やその後の社会的・経済的不安定の状況も絡めて議論する。これらの本論を経て、「響き」の批判的含意について、包括的かつ思索

的に述べるエピソードをもつて本書は閉じられる。

チンドン屋という、ある時空間に固有と言いうる文化実践についての事実上初めての学術的研究書である本書は、そうした性格の著作にしばしば求められるような概説的・入門的な側面はそれほど認められない。古典的な民族誌のような、チンドン屋の活動や団体の特徴に関する分類や、演奏曲目や具体的な演奏法などについて、体系的な紹介と整理を行う記述がもう少しあれば、チンドン屋という文化形態に関わる基本的情報としてより有益だったかもしれないと思う反面、林幸治郎や大熊ワタルのような、自身が優れた思想家でもあり歴史家でもあるような実践者たちの知見と、そうした実践者たちと著者の深い信頼関係に基づく対話からしか生まれ得ない洞察を十分に活かすには、第一章で論じられるチンドン屋の歩行のようにジグザグに行きつ戻りつ進むような本書の記述がふさわしいとも思われる。そこには「音の哲学者であり路上の民族誌学者」(p. 7)である実践者たちと、優れた書き手であり演奏者であり、何より実践者の発する音と話を傾聴し、街中で聞こえる音を感知する聴き手／聞き手である著者の「共振」が鳴り渡っている。もちろん、旧来型の調査者とインフォーマントの固定的・権力的な関係に対する批判的な意識を含む現代の優れた民族誌は、ほとんどの場合、両者の相互作用的な関係に支えられていると言えるが、「響き」という概念(あるいは比喩)によつ

て、そのような関係を分析的かつ想像的・創造的に捉え返していることは、現代の文化に関わる研究において大きな美点である。評者は、本書の日本語訳に取り掛かっているが、その過程で、著者とチンドン屋実践者たちとの濃密な信頼関係を目の当たりにする機会をしばしば得ている。著者が指摘する通り、近代日本において、チンドン屋の響きはその意味を絶えず変えながら鳴り続けてきたが、本書の刊行が、その過程にさらに新たな響きを付け加えることは間違いない。